

居住空間の風土性(その自然環境と社会環境)を読む

その一(1989年夏 北欧を回って)

デザイン学科 スペース・コース

定 松 修 三

目 次

- I. まえがき・研修テーマと前提
(インテリアデザインの流れを北国の居住空間にたどる)
- (1) 居住空間の風土性
- (2) インテリアデザインのルーツ
- II. 特別研修にて北欧の国々を回る, 行程と所感
- (1) フィンランド, ヘルシンキ
- (2) フィンランド, ポルヴォー
- (3) スウェーデン, ストックホルム
- (4) ノルウェー, オスロ
- (5) デンマーク, コペンハーゲン
- (6) デンマーク, オーデンセ
- III. 北欧の風土の様相に関する覚書
- (1) 自然風土について
- (2) 社会的風土について
- IV. 北欧の居住空間についての覚書
- (1) 窓が小さいこと
- (2) 木を使うこと
- (3) 織物を多用すること
- (4) 暖炉のある空間
- (5) 壁を飾る
- V. あとがき・研修の主題に関する今後の課題
- VI. 参考文献

I. まえがき・研修のテーマと前提

(インテリアデザインの流れを北国の居住空間にたどる)

(1) 居住空間の風土性

近代を迎える前の地球上の全ての人々の居住様式は、各々の風土と抜き差しならぬ関係を保っていた。現代でもその名残はあって、一部の住環境では風土を深く知らしめるシンボリックな型を保有しているものもある。

しかし、一般的に言えば、近代以降には人間の技術力が徐々に風土の困難を克服し、それぞれの居住様式を少しずつ風土から遊離させる働きが強められてきたのである。

しかも、近代以降の世界各地の居住様式は、人々の都合によって拡散したり、混在したり、様々に編成替えされるようなことが生じてきた。

特に、ヨーロッパの人々によって世界各地につくられた植民地や統治域に持ち込まれた彼らの居住様式は、それぞれの地域での風土的折衷様式であるとか、あるいはコロニアルなものへと編成替えをしながら定着していった。

従って、なかには北の居住様式と南の居住様式との強烈的な混成状態もあった。

本来、人々の生活習俗は、生活をするその風土条件に否応なく適応しようとして形成される筈のものだ。しかし、上記のように人間が移動していったような場合には別の様相も生じてくる。即ち、一つの民族が自らの風土において、長い歴史と共に培った伝統のある習俗は、いつしか風土を超えた形となって、個々の生活そのものを覆いつくし

ているものだから、占領して進出したり、移民として移住したとき、新たな地域が大きな風土差をもって迎えた場合、それらの人々は自分達の遺産的習俗を抱え、拘りを捨てきれないままに、また新たな風土条件に馴染む努力をしなければならない。すると、多くの場合、そこに生み出される居住様式は渾沌としたものから始まるしかない。そして恐らく、合理的な形へ、すんなり移行されることはまれだろう。いや、むしろ、取捨選択の果て、すっきりした形に収まるには何世代にもわたる時間が必要とされた。人間の精神的な所作は複雑にして頑迷なものである。

しかし、それにしても、今日の地球上の住まいは、世界中の都市生活が均一化していきつつあるのを反映して、その風土的独自性をいかに失いつつあるのは事実である。

生活の器としての住まいであれば、そこに住む人々の生活習俗が都市的情報によって、あらゆる方向から強い影響を受けながら変質を速めている今日の状況下においては、その風土的整合性も加速度的に崩壊し、均質化、類似化へと進んでいくのは避けられないことなのであろう。

もとより「住まいの風土的純粹形態」といったものを絶対的存在としてあげることは難しい。

そもそも人間の生活に関わる場所に純粹な形態といったものが存在するとは考え難いのである。

ここに言う風土的居住様式も、単に、概念的な提示をしているものと取っておいて頂く以外にない。しかし、そうは言っても、住まいの形、室内空間のしつらいは、その地域の人々の生活の実体を推察させるものには違いなく、それが集合したところに見えてくる傾向は、居住様式や習俗の意味も、風土的生理も、人々が背負っている過去も、それら諸々を分かりやすく語りかけるものとして表出してくるであろうことは疑うべくもない。

状況の複雑な今日の環境であるが、居住空間の風土性を読み取るためには、それらをまず観て、生活の実感を得た上で思考を重ねていかなければならない。

(2) インテリアデザインのルーツ

世界中の多様な住まいの形態を考えると、原始形態は別として、そのデザインの原型といったものを問うのはなかなか難しいことであろう。

インテリアデザインのルーツというような空間を求めると、多くの場合は一定の区域において繁栄を誇った歴史上の文明に属し、なお、著名な芸術様式としてその評価を定かにしたモニュメンタルな建造物の空間が挙げられてくる。

確かにそれらは一時代の、一地域の、人間の創り得たものの代表であることは間違いない。それらはまず周囲の人々に影響を与え、更に広域の人々に伝わり、そして裾野の大勢の人々の居住様式に影響を与えるべきものであったらう。

しかし、残念ながら、芸術様式として捉えられている空間デザインの多くは、とてつもなく豪華で贅沢で、飛び抜けて高度な技能がなければ生み出せないものである。製作に長い時間をかけ、二つとは作り出せない存在であれば、統治者、或は支配層が権勢欲をもって、時の頂点の一つをもぎ取ったものであれば、追従の広がりや許されないのは当然であったと考えられる。

近代以後、それら遺産となっているシンボルデザインを、不連続にコピーしては折衷し、混合したデザインが多産されるようになった。

なるほどそれらはわれわれの身近にまで至って、過去の様々な文明の古典的雰囲気デザインの知識としてばらまいた。しかしそれらはルーツをたどる必要や意味は少ない。なぜなら、それらの原典の多くはデザインソース更にはファッションソースとして重宝がられているだけだからである。

インテリアデザインの水流を逆に辿るということは、その形式や要素を理解するのに、きわめて重要なことなのだが、理解し抽出した典型を、単に目先を変えんがためのデザインソースとして使うのでは意味が無い。

居住空間のデザインではスタートラインから多様な要素の統合を意味のある水流にのせて築いていかなければならない。そのために、その水流をたどり、即ちルーツをよく理解し、その意味を十

分に掌握し、取り組まなければならないのである。

ところで、居住空間のデザインルーツを探究する上手な方法は、或地域の風土と、生活習俗そして居住様式にそれなりの整合性があり、しかもそれらの様々なバリエーションが分かりやすい脈路をもって並存し、それに一地域や一時代のまとまったものが見え易く存在していて、その自然風土や社会的風土を通して築いてきた人々の営みが理解し易いような、高い独自の文化を持っている地域を対象にすることであろう。それに歴史の変遷や時代的環境等の知識が得られ易く、更に、空間や空間の装飾などの意味を解きほぐし易い、都合のよい地域を選び出すことであろう。

そうしてみると、まずヨーロッパの国々に目を向けざるを得ず、また、風土的観点から北欧の国々が理想的だということになる。

言うまでもなく、北の地域には厳しい自然風土を控えた生活がある。その風土が生活空間を大切にさせ、広い区域の人々が比較的等質な生活の営みを育んできた。その北欧の国々の歴史を粗くみると、農耕と武力を備えた交易の集団生活が古代の生活を支え、その後、封建時代、そして王国同士の戦いの歴史もあるが、それら専制王族が目を剝くような栄華を築いてきたあとはない。南の地域から侵略された歴史はもちろんない。生活習俗は交易の範囲が広がっていった時代があったとはいえ、雑混様式が一般化したものは滅多にみられない。自然風土は極寒区域を除けば、水や森林の豊かな自然が人々を潤し、質の高い社会、精神性の高い人々を育んだ。その民族的特徴であるくぐもった感情、美意識の高さは地域全般に通ずる居住様式の美しさ、そして美しい生活用品を創る力となってきた。従って、北欧のイメージとして描かれるものの多くは、即ち生活空間のデザイン、インテリアデザインを中心に表出され、世界中から象徴的存在と目された一時代もあった。

さて、予断を持ち過ぎている嫌いはあるが、インテリアデザインの一つの流れを北の地域に求めることには、共感の認識も多いはずである。

何せ、この逆の、南の地域に、あの、室内に身

を寄せ合う濃密でヒューマンな空間があるとは、とてもイメージすることはできない。太陽の恵み溢れる地域にそれを捜し求めるのは困難などころか、むしろ無駄な希求としか思われまいであろう。

II. 特別研修にて北欧の国々を回る、行程と所感

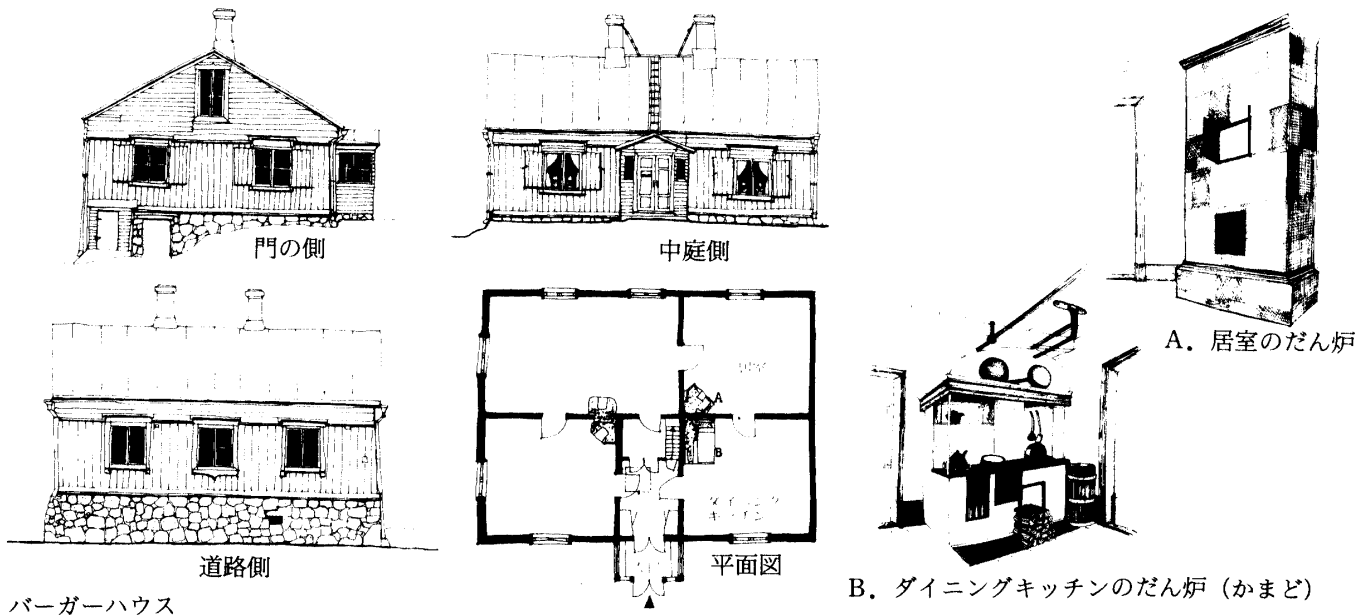
(1) フィンランド、ヘルシンキ

(1989.08.20~24)

日本ではまだこれから先に残暑のピークがくると予想される時に、北国フィンランドはもはや冷え込みの始まった秋を迎えていた。観光シーズンもそろそろ終わり、早朝はヴァカンスを終えてしまった人々がコートを着込んで幾らか白い息を見せながら職場に急いでいる。ここから研修を始める。博物館も、美術館も著名建造物も欲張って観て回る。だが、長々とあれもこれも記すことはやめ、居住空間に関する部分の抄録にとどめたい。

1. バーガーハウス：19世紀から持ち越されてきた中産階級の木造小住宅で、市の博物館として公開している。コートにL字形に2棟建ち、奥の棟はオフィスに使い、道路に平行な棟を生活の様子をそのままに展示している。この棟は正方形に近く、田の字形のようなプランをしていて、入口と屋根裏部屋に上がる階段のための狭いホールを囲むように4部屋がある。ホール右が台所、あとの3部屋は居室。各部屋に暖炉が付き、二つの暖炉に一本の煙突が立つ。積層木造、即ちログハウスの室の壁は化粧紙の重ね張り、或は厚紙張りで、窓枠もドアも各々の部屋の壁色に合わせて塗装されている。小住宅とはいえ、最小の部屋が12畳ぐらいあるが、天井が低く、家具調度が大いなので、日本の空間とは比較されないとしても、狭苦しい感じは否めない。窓も小さい。部屋は暗く、隅に大きな暖炉が付き、フィンランドの風土を背景にした小住宅という実感は確かにある。

2. セウラサーリ野外博物館：バーガーハウスのような市中の木造住宅は火災に見舞われやすいため、あらかた無くなってしまったのだが、野外博物館はそうしたものを保存し展示することを目的にしているところである。年代も地域も広く収集



バーガーハウス

し、いわゆるフィンランド民家およそ30の家屋を、森の小道に沿って景観を整えながら展示している。

広い森の中をくまなく観て回るにはしかし、2日間くらいかけなければ充分ではない。

木造家屋はほとんどが積層のログハウスで屋根は板葺、床は土間作業部分と板張り居室という、日本家屋などより木材依存度の高い木造家屋と言えよう。つまり構成材のシンプルな家屋というふうにも言えるだろう。壁の積層材は最小限に、また屋根裏部屋を使用することもあり、天井高は低めに抑えている。調理のくどと暖炉は兼用も多い。

焚き口は膝とか腰の高さで、鍋はその上に掛け、その上部奥にパンを焼くオーブンの付いたものが多い。もっとも、パンは一年に2度程、まとめて焼く程度だったようだ。また、そこには大きめの食卓が併せて設置されている。食事やそれに伴う休息の場所である。食卓は家、家族を象徴し、家族のアイデンティティを築いている。一方、個人的休息のスペースである寝床は狭苦しい箱寝台である。戸が付いたもの、カーテンを閉ざすもの、美しい飾り縁を付けたものなど様々だが、いずれも共通しているのは丈が短いことである。寒気にちぢこまって寝る姿を想像する。アルコーブ型と

称するこのような寝台から直感的に受ける感じは日本家屋の押入である。しかし、私が受ける苦しいとか湿気が溜りそうだ等といったマイナスの感覚は、こちらでは、恐らく、暖かく包み込まれ、熱が逃げないといったプラスの感覚をもたらすものとして受け入れられているのであろう。他にも風土の差をあげるなら、もちろん装飾的なものが筆頭であろう。民家の多くの室内は赤、グリーン、青やオレンジ等の図柄に塗飾されているが、たとえ補色構成であっても、不思議と不快な気分はない。室内が暗いせいもあるだろうが、木の造作のおおらかさ、重厚さも伴い、空間は暖かく和み、人間の住まいを濃厚に演出しているのである。風土の差は人々の感覚の差を、所作の差を、そして表出されたものに対する認識の差を形成するのである。

(2) フィンランド、ポルヴォー

(1989.08.24~25)

ポルボーはヘルシンキ中央駅近くのバスセンターよりバスで北東に50キロ程走って到達する。

ヘルシンキから、逆方向に行くとタピオラ等近代デザインの粋、先駆的な居住環境デザインのサンプルを観ることができるが、こちらは方位が逆というだけではなく、近代デザインとは正反対の、

古さを保持し、郷愁を見せる居住環境なのである。

1. ルーネベリ家：一世紀前の詩人が住んだ生活様式を娘の代の今日まで変えないで保持してきた結果、19世紀の雰囲気伝える貴重な生活空間として展示されることになったものである。

家具調度などは使われていたそのままなのが魅力的である。扱いがよく、少しも傷んだものはない。室内装飾の全体を通してみればこの家人の嗜好の質の高かったことが分かる。家具類は現代の北欧家具デザインの原形と言えるような魅力を持ったものばかりだ。クッションや椅子などの張布と絨毯、それにカーテン等が深紅にコーディネートされているかと思えば、続く部屋ではそれらが深いブルーにまとめられている。各部屋の壁は美しいジャガード織布で、まさにそれ以外無いと言うほど、ぴったりしたもの選ばれている。絵画や置物のコレクションも場所を得ている。観葉植物もそうである。

それらの構成、配置のよさ、組合せのよさは、さほどでもない広さのスペースのゆとりを感じさせる程のものだ。まるでインテリアデザインのテキストのように、空間ともとの調和が根幹、かくあるべしということを示している空間である。

2. リバーサイドハウス：バスがポルヴォーの町へ入ってきたとき、すぐ眼に飛び込んで来た風景、この川沿いに建ち並ぶ赤い木造家屋群には感嘆の声を抑えきれなかった。家に塗られた赤い塗料はヘルシンキのセウラサーリで既に見知っていた。



ポルヴォーのリバーサイドハウス

長く雪に覆われるこの国では木造家屋を長持ちさせるために、つい近年まで防腐剤としてこの塗装を義務づけてきた。今日でも農家などには散見することができる。ここの町では半漁半商の家々が全部同色で、川岸に密に建ち並んでいる。群れて塊となった家屋群は川面に映り、見事な絵画的風景を作り出している。古い町並みの中でも飛び抜けて美しい、このウォーターフロントデザインは、これだけで町の看板となっている。

3. 旧町並み：ポルヴォーの町中のほとんどは古い木造家屋が建ち並ぶ通りである。今日の生活がどのように成り立つのか気になる。店々の内部は不調和でやや生彩が無い。家屋の外観は遠眼にはよいが近くに立つと補修の行き届かぬ面も見え、古い家屋での生活は決して楽ではないと知る。しかし、住宅の家並が続く通りはこじんまりときれいな家屋が建ち並び、まるで色見本を見ているように一戸一戸が化粧している。隅柱と窓枠とを外壁に調和する色に塗り分けた2トーン仕上げが多く、ドアには個性的な飾りを付け、窓の内側には花の鉢と優しい柄のカーテンで飾り、表現はなかなか豊かなのだ。しかし町全体は個々の家の表情をまとめて美しいハーモニーを生み、良いセンスの環境を誇る。自己主張でたちどころに調和を失う我らが身の回りとは大きな隔りがある。

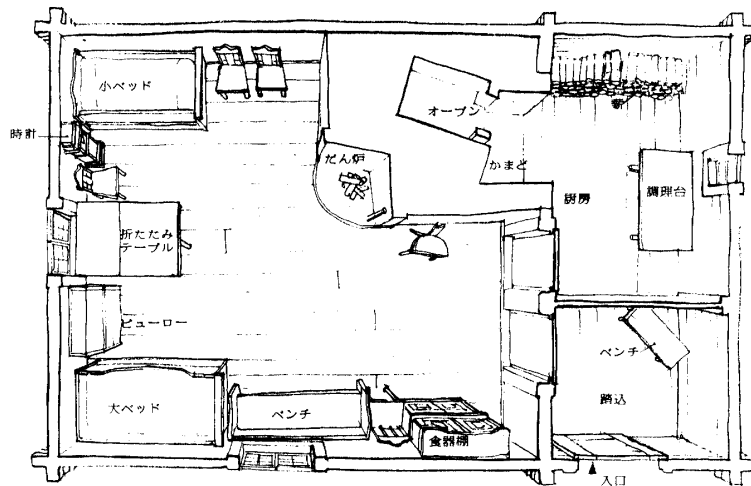
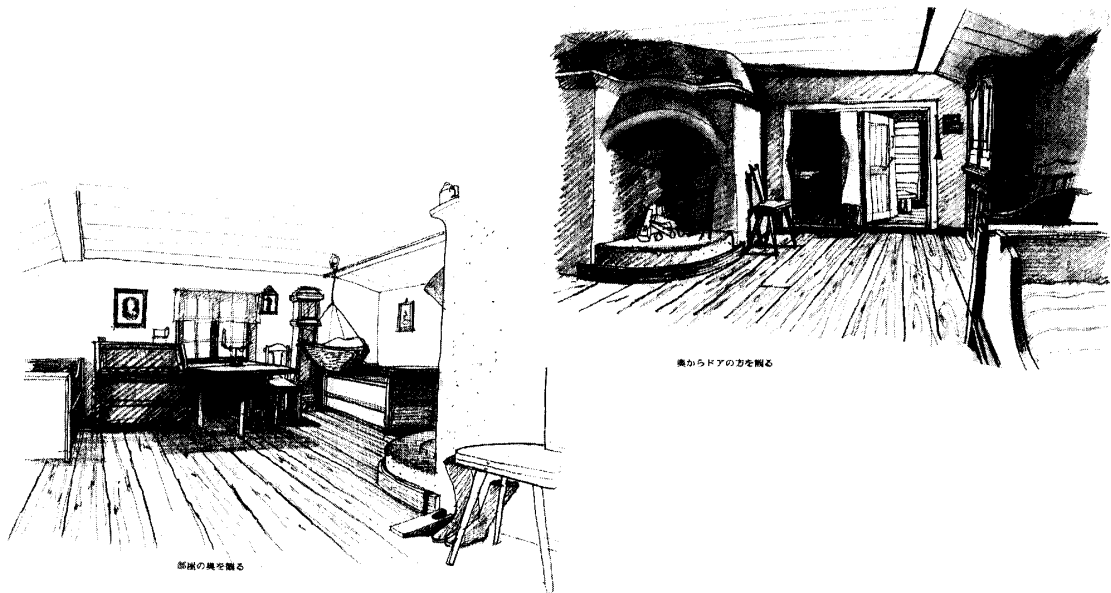
ここでは全部の人に周りとの調和をとる表現があり、各々が高いセンスと知性をのぞかせる自己表現になるところが羨ましい。他人の心を自分と同じように大切に考え、心広い隣人同士で守り合う、よい環境を形成しようという意志を理解することができる。

繰り返すが、我らが身の回りはガラクタと不協和音を作り出し、住民全体が自らスラム街へ近づく方向を選ぶ。なお知性を誇る自己表現もできず、このような古い町並みを保つ禁欲的な生活ももちろんできないだろう。

(3) スウェーデン、ストックホルム

(1989.08.26~31)

ストックホルムに着くと気候はやや夏に戻った感じだ。ここにはスカンセンという有名な野外博



兵士の家・平面図

物館がある。博物館，美術館，都市や建築等にも熱くなった。しかしメモはスカンセンのみとする。
 1. スカンセン野外博物館：スカンセンは野外博物館の先達である。東欧も含め，現在，ヨーロッパには数多くの野外博物館があるが，すべてここから広がったものである。

ここ本元はしかし，小動物園等があったりして幾分遊園地化している嫌いも無い訳ではないが，各地方の民家を中心に，人々の生活習俗を見せた

りする真面目なものである。

各地折々の祭りを見せ，民具などの製作を見せ，家畜などを見せ，ということから自然に遊園地的になってきたものであろう。展示している家屋は様々だが小さな家も多い。

「兵士の家」というのをメモしてみよう。半農半軍兵の住まいである。家屋は丸太組木造いわゆるログハウスである。屋根は板張りの上に保温材の土を厚く乗せ，生え草がよく延びている。戸を

開けて入ると、1坪ほどの板張りの床の踏み込み間で、小さなベンチ様のものが置いてある。すぐ左手に居室への入口がある。居室はもちろん板張り床である。居室に入った右手に大きな炉がある。

この炉は部屋の床面積の、実に4分の1近くを占めてしまっているのである。炉の手前、右手の戸を開けると約1.5坪の広さの台所になる。

台所側に炉が続き、かまどとオーヴンになる。

台所にあるのは小窓と調理台らしい木の台だけだ。鍋などは壁に掛ける。居室に戻ろう。耐火煉瓦積み炉の表面は漆喰を塗り固めてあり、形は有機的である。炉の後ろ側の壁は炉につぶされていない部分があり、わずか2間足らずだが、小椅子2脚と小振りのベッドを置いている。左手の妻側の壁は2.5間と少しあって、中央に窓があり、その窓下にテーブルを置き、またその右側に背の高いグランドファーザークロックと椅子を、左側にはライティングビューローと肖像画をセットしている。

さて手前側の壁にはビューローに近い方から言うと、まずベッドが置かれ、それから窓、窓の上に兵士の銃と帽子が掛かって、それでやっと兵士の住んだ家ということが分かる。窓下にはソファベンチがある。そのこちら、入口ドア近くに小さな本棚、更に背の高い食器棚が置かれている。

その他にあるものは、小ベッドの近くに天井から下げている揺り籠、恐らく赤ん坊のためのものであろう。そのほか幾つかの小椅子もある。寒くなればこうした小椅子を炉のかたわらに寄せて、作業したり、休んで語らったりしたのであろう。小ベッドの頭上の壁にアイコンらしいものが掛けられ、ドアの傍らにはひょっと持ち込んだ農具が無造作に置かれている。生活を成り立たせている農業をベースにした素朴な室内だが、徴用にすぐさま応じる軍人の誇りを銃等が象徴する。かつての小市民の生活を鮮やかにイメージさせる家屋の展示なのである。

(4) ノルウェー、オスロ

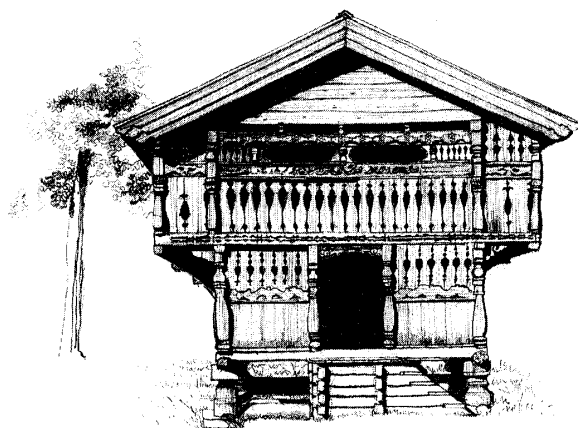
(1989.09.01~05)

オスロに到着しては快晴。海も街も森もすべてがキラキラと輝き、なんと美しい風土だろうと羨望、

ため息、心には嫉妬に近い感情が湧く。しかし、観光シーズンは昨日終えており、街中の美術館、博物館等は開いているものの、郊外の野外博物館は約半分程の展示に縮小されてしまっている。

つまり町家屋等の展示部分は観られない。その半分となった野外博物館を記しておこう。

1. ノルウェー民族博物館：オスロの郊外、ビッグドイという半島に、ヴァイキング博物館などと共に設営されている野外博物館である。もともと、この半島は住宅地でもあり、美しい住宅もゆつたりと建ち並んでいる。それを眺めて歩いても飽きない。



ノルウェーの装飾の多い木造家屋 (古)

半島の先は海水浴場や臨海公園で、この景観の衝撃的な美しさは言葉にできない。人の手が入った林と浜辺だが、これほど自然を美しく演出した景観はかつて見たことがなかった。自然の他何もないのだが、樹々、木漏れ陽、芝の青さ、樹間の光る海、小石の浜に寄せる穏やかな波、自然だけの音、微かな風、潮と林の匂い、思い出したが、こんな桃源郷は幼い頃には身近に沢山あった。傷んでいない、生きている自然を久しぶりで視たのである。

ノルウェーはヴァイキングの流れに最も通じる美意識を持っていると思われる。木造教会の東南アジアの寺院にも似た形と飾りは、ヴァイキングの様々な遺物に感じる特異な雰囲気のものと同じ

ように感じさせる。またこれも東南アジアの高床の倉に似て床を高く上げた商店家屋の形等にも、その雰囲気はある。外囲いの板壁をハートやダイア型にくり抜いて幾らかの光を導入する仕口や柱と扉に彫った模様などなど、そのノルウェー独自の美意識は、やはりヴァイキング時代の装飾形態を引きずっている感がある。

家屋構造の分布図を見ると、ノルウェーはフィンランド、スウェーデンと共に丸太組積造の分布帯で、住まいとしての家屋は類似しているが、中でも最もぶこつ、勇壮な形態への傾斜があるように思われる。丸太材も太い程良しとするようだし、隅の組手も不揃いで荒々しい。タール系防腐塗料に思われる塗装で焼けかかった色の家屋。屋根の破風に近い部分に押え石を粗く乗せ、整えようという気の無い野生味が特徴と感じたりする。

一方ではしかし、その独特な形、大きな束柱で床を上げ、飾り階段を付けた入口と前廊下をおいた飾ったドア。また、二階も前後か左右に迫り出して廊下とかヴェランダ様のスペースを設け、その外壁に、先に記したような、多様な模様穴を開けたりする形を見ると、繊細さもまた、併せ持っている。また、室内は意外に堅く、きっちりしたまとまりがある。家具にも細かい神経を使っている気配があり、室内の色調も美しい。造形力の高い北欧圏の人々なのである。

(5) デンマーク、コペンハーゲン

(1989.09.06~10)

コペンハーゲンは宮殿や美術館、博物館、プレイランド、ショッピングモール、等、都市型観光の資産が豊かで、市内はツアーの観光客が群集している。野外博物館があるのだが、市内から遠く、行き着くのに苦勞し、時間が足りなくなる。

1. フリランス野外博物館：コペンハーゲンの北部郊外、コペンハーゲンのあるフリランス島を中心にして、各地域の民家を集めた野外博物館(オープンエアミュージアム)である。

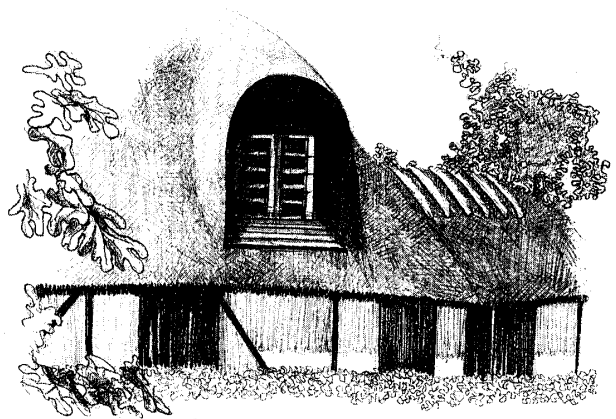
ここデンマークの野外博物館には、丸太積層家屋(ログハウス)の展示は見あたらず、軸枠組み(ハーフティンバー)造りのヨーロッパの民家と

同じものが建ち並ぶ。木軸の間にはレンガを積み、そのハーフティンバーを美しく目立たせて装飾的効果を高めたものと、すっかり同色に塗りつぶして木軸を目立たないようにしているものがある。

その意図の分かれるところは良く把握できない。

しかし、全ての家屋は窓枠の内外をそれぞれ好ましい色にペイントしている。窓辺のデザインに神経を使うことは、北国の家屋に生活する人々に共通した感覚として生成されてくるものらしい。

室内は絵柄タイルを張ったり、家具はもちろん壁にも建具にも飾り枠で枠取りするなど、またその鏡板や内壁に絵を描き込んだり、多様な楽しみ方がでてくる。もちろんそれらの感覚、或は美意識はかなりレベルの高いもので、過飾にならず、質感良く、バランス良く、調和をつくりだしている。つまり、全体にコーディネーションが行き届いているのである。そうした装飾の内容、或は方



デンマークの葦藁屋根

法においてはデンマークは他のスカンジナビア半島諸国とは少々違ったものを感じる。

これまで見たフィンランドを始め、スウェーデン、ノルウェーで木造家屋の主体となっている丸太積層(ログハウス)構法は、並の見方をすれば、少し素朴、原始的感覚、牧歌的なものという先入観をもって観察し易い。しかし、インテリアデザインもまた、それに即して見てしまうと、本質的なデザインを見誤る恐れがあるだろう。もともと

文化史的に違った流れを背景にしている構法に後進性、劣性を冠してはいけな

しかし、である。例えば屋根の形についてみれば、幾らかの複雑を可能にするハーフティンバー造りに分がある点、技術的な先進、後進をつい読みとりたくもなるものだ。このフリランス野外博物館で見る家屋でも、草葺屋根に設けられた高窓が庇様にせり上げられて二段になって、その曲面がきれいな刈り込みで個性的な造形となっているのなどを見ると、技術の腕前も、技法プログラムにも、多様な意味合のレベルの差が厳然として存在しているように思われてくる。

明らかに言えることは、ここにある家屋の全ては丸太積層家屋の生硬さがない。造形の自由さを持ち、複雑な美意識が発揮される条件を手にいれたとも思える。例えば窓が大きく、また多く開かれている結果、同じような家具調度も軽快な、洗練されたものに見えてくる。いろいろな対比、例えば線の太さのコントラストも、面積のそれも、色彩も、より細密にその効果を計算しなければならぬ状態になってくる。そこに、その風土に育つ美意識が自然に異なってくる因がある。重厚さ、神秘さを少しばかり喪失する代わりに、明るく、軽く、すっきりした輪郭線が表出してくる。

私の経験で言えば、窓辺に置かれているゼラニウムの花を室内でみると、スウェーデンでは、その明りを吸う神秘の紅が魔の魅力をもつかのように感じたが、ここデンマークではいつもの紅花でしかない。人の心はわずかの光の差を大きな差に変換して、空間に投射するのである。

(6) デンマーク、オーデンセ

(1989.09.11~12)

列車に乗ったまま、海を越してフン島に渡ると、アンデルセンの生地として知られた観光都市オーデンセに入る。アンデルセンの童話を誇りにし、アンデルセンが生きた時代の町並みが再生保存され、観光資源となっている。しかし、街は一方で近代化した先進都市も形成させ、そのギャップは市民にとっていかばかりか気がかりであった。

ここにもフン島の広大な農耕地の民家を集め

た野外博物館がある。

1. アンデルセン旧町並み

アンデルセンの生家を中心にしたアンデルセン博物館というのがある。著作原稿や挿絵原画や世界中で出版されたアンデルセン童話の本、著作に関連する資料、時代背景、研究書、アンデルセンの書斎。次々のいっぱい展示を見ると、デンマークではアンデルセンほどに人々から誇りに思われている人は他にいないであろうと思われる。

その周辺の街はアンデルセンが生きた当時さながらの情景を思い起こさせる町並みに整えている。

石畳の道路をはさんで、彩りを変えた小さな家々がならぶ風景は、美しい「アンデルセン童話の世界」が出現しているのだ。

ここはデンマークの人々のノスタルジックタウンスケープなのである。

2. フン野外博物館

この野外博物館は農業という一大産業を包括的に展示している趣がある。水車粉挽、風車粉挽、馬引き粉挽、煉瓦焼き工場、木靴作り、機織、農具作り、こういった家内工業の一連の家屋が巧みに配置されている。展示されている農家そのものは大きな構えのものが多く。作業小屋、家畜小屋、居住家屋が広い中庭をぐるりと囲んだ形式の、とてつもなく立派な農家が多くある。居住家屋部分は当然部屋数も多い。フェスティバルホールという大勢の人々が集うような大部屋もある。しかし、暖炉がやや少ないようなのが意外に感じられた。

ノルウェーやスウェーデンやフィンランドの野外博物館にあった農家は部屋数は少なく、各部屋には必ず暖炉があった。デンマークは寒さも大人しいと見るべきなのであろうか。農家以外では石造りの牢獄とか、遊技小屋とか、病院、等の小さな家屋も点在するが、牧師館という農家以上の大きな家屋もある。貸家付きでえんえんと続く家畜小屋が並立し、家畜を遊ばせる広場が広く広く続く。牧師の住まいの中にも客室と客の泊まり部屋がある。ここはさすがに居室にそれぞれ暖炉の口が開くように、三部屋に一つの割で壁の交差する角に暖炉を設けてある。外側からみると、L型の家

屋に、厨房の竈も含めて5本の煙突が見えた。

居室はそれぞれ質の高いインテリアデザインで成立ち、生活レベルの高さが推し量られる。インテリアはほとんどヨーロッパ的な明るさ、洗練された美しさを持っている。ヨーロッパに影響を受けた距離の近さ、歴史的に文化的同一基盤を持っていたことが多かったことなど、風土的、生活習俗的に他のスカンジナビア諸国とは、わずかな差異があり、しかもそれがなかなか大きく感じられるのである。

さて以上、北欧の国々を回り、実見聞の一部とその所感をかいつまんで述べた。またテーマについての浅慮の一端をこの後に続けたい。

III. 北欧の風土の様相に関する覚書

(1) 自然風土について

北欧は冷帯から寒帯に至る気候帯にある。

フィンランド、スウェーデン、ノルウェーは北極圏にかかり、そこでは夏の間、日没の無い期間がある。白夜の国と言われるように、夏の夜はいつまでも明るい。昼中も陽は低く、それはたいへん眼にまぶしい。逆に、冬季は暗い夜が長くなる。

だいぶ古い話になるが、暮しの手帳社から出された「古い国からの新しい手紙」というデンマークのヘレン・K・ニールセンという女性特派員が書いた本に、北欧の気候風土を女性らしく描写していたのを思い出した。例えばスウェーデンの北海岸の或る入江の村の気候をこう書いている。……また夏が逝ってしまっ、ながい陰気な月日がこれから続くのです。秋雨が終日しとしととふりはじめ、やがて雨は激しい嵐になり、おだやかな入江は荒れ狂い、猛り立つ怒濤の海と化し、波は渚にさか巻き、家の戸口まで洗ってしまうのです。……そのうちに、雪が降りはじめ、何日も何日もこやみなく降りつづいて、見わたすかぎり真っ白なやわらかなマントのように、何年も丹精して来た百合や薔薇の咲く小さな庭もすっかり覆ってしまいます。この村に生まれて、昔ながらの小さな家にずっと暮らして来たおじいさんやおばあさんたちのご自慢の果樹の枝も、地面すれす

れにたわんで、今にもびしんと音を立てて折れはしないかと、老人達はハラハラしながら耳をすましているのです。ほんとうに、ここの冬はつらいことが多いのです。何ヵ月も温度は零下何度にも下がったままで、入江には厚氷がはりつめ、海の上を何哩も平気で歩けるくらいなのです。……こうしたすさまじい陰惨な冬の間は、全くの冬ごもりというわけで、村の人たちは戸をしめきって、暖炉のまわりにうずくまって暮らすのです。小さな村はすっかり眠っているようです。……しかし冬は遅々とした足取りながらも過ぎてゆくのです。まだ弱いけれども、たのもしい陽のひかりに、雪はとけてゆき、人々は、ほんのすこし窓を開いて、外の空気をにおってみて、うれしそうにほほえみます。もう大丈夫、春はそこまで来ています。日ごとに新しい気配が感じられるのです。マツユキ草やサフランが黒い土から頭をもたげ、芝草が芽を出し、すこしずつやわらかな緑の絨毯を家のまわりに拡げてゆきます。やがて、水仙や釣鐘草、ヒヤシンス、チューリップなどが、とりどりのいろにかがやいて、大気は甘い匂いに溢れるのです。……どの家にも、庭にも、道路にも、小径にも、到るところに、雪のように真っ白な果樹の花びらが、散り乱れているのです。すももや、山榎や、木莓が古い石垣や野原や森に、まっ白な毛氈を拡げているのです。そよ風がライラックや忍冬やジャスミンや野茨の、甘い香気をのせてくるたびに、村人たちは春のよろこびにうっとりとなるのです。……夏がくるのです。浜辺の丘の藪や籬で、ナイチンゲールが鳴いています。緑の草の上では、花で飾ったミッドサマーポールのまわりを、子供たちが、楽しそうに踊りまわり、その群の中から、歌声は晴ればれと澄んで聞こえて来ます。

と、表相的な記述だが、一年を通した気候をこのように書いている。

わが国においても北と南には大きな開きがあるように、このスウェーデンの場合でも北と南とはかなり違う。南部はデンマークやドイツに似て、針葉樹の間にカシ、トネリコ、カエデ、ニレ、ブナ等の広葉樹が混在している。これは温帯林と呼

ぶべきものであろう。北に行くとマツ、スギ、モミ等の針葉樹林帯が国土の大半を占める。いわゆる寒帯林である。更に北に行けば白樺帯、それに灌木帯、その先はツンドラとなる。農業は南部が主だが、北域に強いライ麦を主生産としても、なお、食料生産の自給率は低いようである(デンマークでは別だが)。蛇足ながら、街で見た様子では野菜が果物と同じように扱われる感覚があるように思われた。地域の違いも、もちろんあろう。春や秋に、雨の日が多いのだ、少ないのだといったことや、あの地域は夏にぐずつきやすい天候が続くだとか、それぞれ緯度や地形の条件によって気候はいろいろな特徴を持っている。しかし、長く、暗く、閉ざされた冬と、あっという間に過ぎる解放的な夏とが人々の生活の枠組みを造っているという点だけは北欧に共通した自然相だと言えるであろう。北欧の一年当りの平均日照時間は、1,300時間もない程度である。南欧の2~3分の1にしか当たらない。温度も南欧と比べれば常に摂氏10度程度低いのである。人々は、冬から逃れた自然の得難い貴重さを大切に思い、自然の破壊には敏感過ぎる意識を持っている。冷寒帯においては自然も繁らないし暴れない。冬を除いて、美しい形を変わず保ち続けている。そうした風景は北欧の人々に共通する美意識を与え、また育てていると思えるのである。風景といえば、岩石の露出した地肌を見せる、一見身の引き締まるような風景も多いが、恐ろしく高い梢を仰ぎ見る森林の風景も多い。恐らく、シベリア、アラスカ、カナダ等に共通する森林地帯を背景にした丸太の組積造家屋(ログハウス)の分布帯としての文化圏を、人々は強く意識していることだろう。

(2) 社会的風土について

伝統、豊かさ、高福祉、平衡感覚、こうした北欧の国々に通じる共通イメージはいつい何時頃からできたものであろうか。

北欧の国、及び人々はヴァイキング時代に、遠くはコンスタンチノーブルまでの交易を盛んにした。のちになってハンザ同盟に組し、14世紀にはスウェーデンはノルウェーと併合し、その後デン

マークによって統合されている。16世紀に、またデンマークから独立し、これら4国はそれぞれ紆余曲折を経る。スウェーデンが最も安定した独立国になるのは19世紀に入ってからである。以後、スウェーデンは第一次大戦も第二次大戦にも中立を通し、その徹底した平和政策によって北欧4国の核となる。

デンマークは19世紀半ばになって絶対王制から自由主義体制へ移行する。第二次大戦のときドイツ侵略の被害を受けたが、以降、平和政策と共に、工、農の輸出国として繁栄を誇る。

同じく、ナチスの侵略を受けたノルウェーは激しい抵抗運動で名を馳せたが、それ以前のノルウェーはデンマーク、後にスウェーデンに支配され、20世紀初頭まで軽い従属関係にあった。

フィンランドもまたスウェーデンと、それから後にはロシアの侵略と支配を受けた。ロシアとは2度にわたり、戦いを余儀なくされている。民族的にはフィン語族はその昔、中アジアから北上してきた弱小民族だという。北欧人の中では背が低い方らしい。日本において北欧の情報を求めようとすると、フィンランドは他の3国と少し違って、民族的、芸術的な広報冊子を豊富に用意している。

そしてそれら冊子がことごとく美しい。

さて、このような北欧の国々は、それぞれの歴史が決して平坦ではない。利害を近隣と争っていたころまではヨーロッパの国々と何も変わるところはない。しかし、どこからかそれを脱皮し、今日の顔を築いた。民族性を言うなら、北欧人は勤勉、忍耐、鈍感、冷酷、自制心(無口)、理性的、だとあったが、用心深いこと、粘り強いこと、そして計画的であることなども挙げられるべきであろう。これらは当然、風土、或は環境から触発された精神作用によるものであろう。しかし、それだけではなく、人々は教養と知性が高く、その個人の能力を充分に発揮させる社会を築き、しかも、過剰な生産、過剰な贅沢へ流れない。個人の尊厳、個人の自立を前提にした国民政治が確立されている。家族や、会社や、団体や、こうした小組織体を対象にはしていない。福祉は対個人、理想的で

ある。個人的社会と言っても、過当競争社会ではない。平衡がとれている。そして羨ましいことに、人々の本質は依然、素朴である。

スウェーデンを筆頭に、北欧社会というと、先進的な福祉制度と、性差のない個人平等主義である。若い人達を中心になったボランティア活動が隅々まで行き届いているように、一人一人が持つ価値観に高い人間性が備わっている。

人間のさがを考えると決して一朝一夕に得られたものでないだろう。教育の質の高さもある。

良識をもってする政治が高い信頼を得ていることもあろう。民族的気質もかんでいるだろう。

ともあれ、北欧の人々の生活はこうした背景を持って築かれている。生活様式の選択がその量ではなく、質の高さに絞られているのも当然だろう。

同じ話の繰り返しになる恐れもあるが、芳武茂介氏の「北欧デザイン紀行」に、フィンランド工芸協会ギュメルス氏の話が抄記されている。それを少し要約してみよう。

……北欧の国々では社会にも個人の生活にも大きな貧富の差はない。南国のような陽光に恵まれぬ人々は室内生活に関心が高い。スウェーデン、フィンランドの歴史には奴隷制度や搾取する封建制度もなかった。法の前に人種、階級の差別なく、性差別もない。人々の気質は本質的に質朴で、贅沢は外からきた。スウェーデンは平和が長期に渡り、一般の生活水準が高く、ものを考え、創る余裕に恵まれている。フィンランドは戦争と平和が繰り返され、戦後、美を求める人々の心が爆発した。また、国全体が周りから隔離された状況で、伝統的工芸美術が保たれてきた。…云々。

これは33年前、日本はまだデザイン後進で、デザインの先達としての北欧で芳武氏がその背景を聞こうとした際の説明のあらましである。

ついでにと言っては悪いが、今度はフィンランドの「FORM・FUNCTION・1987日本語版特集号」に掲載されていたバルプロ・クリヴィク氏の「私たちの暮し方」を抄記させてもらおう。居住空間のデザインに関わる生活像が理解できる。……北国の寒冷な気候での温かい家は炉が重要で、

暖を取る主な依り所となる。

家の最初の型はサヴ・ピルッティ（煙突の無い小屋）といって、玄関ぐちスペースのない四壁の丸太造りで、炉はあるが煙突はない。

壁に沿ってベンチを造り付け、竈の反対のコーナーにテーブルとベンチを置く。後に煙突のある暖炉になり、窓も付き、改良されていく。

17世紀から産業革命までの普遍的な農家は小屋が二つ、吹きさらしのつなぎ、家族は一方の小屋に住み、他方はサウナや納屋や家畜小屋などだが、夏はそこで寝ることもある。住まいとなる小屋は台所であり、寝室であり、仕事部屋であり、全生活の場で多目的部屋なのである。

獣脂のろうそくはクリスマスと休日の時だけ、いつもは暖炉で小薄板を燃して明るさを高めた。

壁のベンチはベッドとしても使い、下部は物入れにした。寝台も高い位置に造り付け、下を有効に使った。

天井の小屋組には道具を置いたり薪や衣服や靴などを置いて乾かした。

冬の間、織り機、糸巻車、木工台等も中に入れ、容器や用品のほとんどは自ら造った。木を多用した。広大な森林が背景にあったのである。

さて、1870以降、フィンランドの工業は急速に多様化する。ロシア市場に向けて金属製品、織物、ガラス、陶磁器、等の工場が建った。

ガッレン・カッレラ（世紀末の画家）が建てた自分のアトリエは伝統を継ぐと同時にロシア的、ビザンチン的要素を組み込み、フィンランドのナショナルロマンティシズムとアーツアンドクラフツ精神の象徴となった。アールヌーヴォーは大きな影響を与え、機能主義的萌芽を見る。

1917年独立以降、ヨーロッパのデザイン思潮は大部分スウェーデン経由で届いた。アルヴァー・アールト（今世紀有数の建築家）らがでてくる。

1930年以後は機能主義的自由が根を下ろす。

人々は家具一式を購入する代わりに、欲しいものを一つずつ購入できるようになった。低収入の層まで購買層を広めたのである。家具はこれまでと違って、快適で、手入れ容易で、簡素で、利用幅を

広げ、移動可能なものとなった。

織物も色彩と肌触りのよい簡素な軽やかなものになった。

当時、全般的には、人々の生活は住宅不足などもあり、厳しさをなかなか抜け出せなかった。

にもかかわらず、当時は応接間を派手にしたいという人々の欲求などが強かった。

設計コンペ等が催され、旧来の農家型の、居間、台所一室型というフィンランド的居住の基本要素が確認されたりし、家具の背後に日常生活を隠さないというテーマも戦争の欠乏期に必然的に定着してきたようであった。

1950年代になると実用の時代を迎え、デザイン革新が進められる。

1960年代に入ると大きく生活様式が変化する。

生活を変革、進展させた力は生活水準が上がったということ、人々の居住空間も広がった。

都市化も進み、消費の好みも変わった。システム家具が生まれ、近代化が従来の農家型家具を駆逐してしまうようなことにもなった。

近年、白木を多用することがインテリアデザインで一般化した。

フィンランド住宅では簡素が最良とされ、それは未来へ引き継がれて行くだろう。あの基本的な農家型の居間空間も未来の生活様式に広く展開されていくだろう。…云々。

フィンランドの人の話だけを出してしまったが、一体に、北欧社会では大量工業生産的なものはそれ程進展しなかったと、あえて言ってもよいだろう。「ヴァイキングの末裔—北欧紀行」を著した荒正人氏は同著の中で、北欧の国々の中では最も工業の進んだスウェーデンに対して

「現代のスウェーディッシュデザインを形成する三つの要素は、典雅な古典主義の伝統、民芸的ムードの活用、家庭中心主義への適応だと言われている。

日本人の趣味にも適っている。だが、これでは、大量生産の方式は採用できない。手工業の段階を余り出ることができない。

それに、機能という点も心もとない。製品が銅

鉄だの木材だの、スウェーデンの特産品に依存している間はよいとして、原料を加工した新しい素材を扱うようになった場合、現在のデザイン主義は、その儘通用しうるだろうか。

それに、家庭中心主義は、若い世代の側から破壊されている。個人と集団が、生活の単位に代わろうとしている。

農民の間から生まれた民芸品も、農業国から工業国に変化するにつれ、骨董化するであろう。そうなれば、何時までも典雅な古典主義の伝統にばかりも依存していられなくなろう。

スウェーディッシュデザインの根本的欠陥は、1930年代に、機能主義を余りに容易に、伝統と調和させてしまったことである。」

まだえんえんと続くが、激し気な論評様の言はこの辺で止めておく。1960年代のことだから、日本人である荒正人氏の気分としては致し方ないとしても、スウェーデンの人たちからすれば、ほつといてくれ、と言いたいところだろう。資源の浪費的な大量生産システムに、何もかにもなだれ込むような工業には誰も手を付けないのである。一步一步進みながら、よいものだけを取得し、実現していく傾向が強い。1990年代に入った今、遅れたり、差が付いたりしているところも確かにあるが、後戻りできない程、ゴミの生産に邁進し続けていなければならない、どこかの社会と比較すれば、どちらがいいかは、自ずから分かる。

それに、スウェーデン国民の多数は大はしゃぎして稼ぎまくるように見える行動には、少なからず自制心が働いてしまうように思える。

19世紀の後半から20世紀初頭にかけて、工業の近代化への道のりが十分に進んでいなかった時代、延べ100万を越える人々が新興国アメリカへ移民せざるを得なかった。スウェーデンの人々の中にはそのことを歴史的、国家的棄民とまで言う人がいる。屈折した心と痛みをまだ引きずっているように思えるのである。

IV. 北欧の居住空間についての覚書

北欧の風土、その自然と社会に関することを、

幾人かの人の言葉を引用させてもらいながら、とりとめなく記したが、居住空間に対するその「影響」、あるいは「因果」がこれで十分、説明された訳では、むしろ、ない。もちろん一方では、それは言葉を尽くしてもなお及ばないものなのではないかという疑念もある。なぜならば、風土と居住空間、或は室内との相関概念は、何となく肌身で感じ取る類のものなのではないかと思えるのである。そしてまた、風土的影響を示しているものがある場合でも、その意味が絶対的で、明快に割り切れるものであるとも言えない。

人文地理の研究者は人々の習俗、家屋、衣服、食物などをたどって、風土を説明する。恐らくその筋道は、人間が自らの防壁を築くには、その地の特質と条件に添った技術や材料を調達して生成しなければならず、それら限定された手段が必然的に関わる以上、地域的なもの、或は気候風土にとって意味あるものが必ず存在する、ということなのであろう。それは確かに間違いないのだが、居住空間に関わっていけばいく程、その多くは不条理そのもの、或いは一貫性や整合性に欠けることが特質とも思われてくるので、問題は単純ではない。つまり、住まいは人間個々が主体であり、人間そのものをまず対象にしなければならないところがあるからである。

しかし、風土に関わる居住空間形成の中に、紛らわしくも人間の集団の、もしくは個人的な事情が絡む部分はこの際、少し乱暴でも見ないでおきたい。もっとも、北欧諸国を見聞することの意味は、それは承知した上で、広く亘って見えてくる一致した形態の概要を紡ぎだすことと最初から承知している。それを前提において、ここではインテリアデザインの一つのルーツとしての、北欧域の空間のイメージを抽出することを試みてみるべきであらう。

風土的影響や因果を人文地理学的データによって公式化していくのではなく、さしあたって、幾つかのデザインのポイントとその意味を点描し、考えを総括したい。

(1) 窓が小さいこと

北欧の民家の多くが、窓を大きくは開けないということは、丸太の積層という構造上の制約があることはもちろんだが、断熱効果を考え、壁穴は必要以上に大きくは取らないという、人々の気持ちにとっての、冬季の寒気の厳しさを主たる理由に考えるべきであらう。

窓そのものの木の枠も、気密性よりは断熱効果を主眼にしたと言わざるを得ない分厚さを持っている。窓の小ささによって、空間は身を包み込む濃密な巣となる。外と内の明るさの差は内なる空間を強く意識させる。

人間にとっての空間、それは、わが身にとって、家があること、住まいがあること、そして寝ぐらがあること、それを意識するときに意味が生じてくる。それは自身が意識する自然や社会とのギャップ、或は疎外感、孤独感といったものに比例して大きなものとなる。自分の居場所、自分を包み込んでくれる優しい人間やものたち、休息の時間を与えてくれる寝床がどれほど自分を支えてくれるか、それこそが人間の空間の原点である。

見方を変えれば、自分の空間を強く意識することは、身の弱さ、身の不遇をかこつということではあるが、そういう時こそ、自らの空間に抱かれる幸福を、確かに味わうことができる時であるに違いない。北欧の居住空間にとっては結果的であつたにせよ「小さな窓を開けた部屋を」ということは、人を求心的な室内空間へ導くデザインの一手法として流れをつくっているのである。

(2) 木を使うこと

カナダ、ソ連、北欧と、北の地域に多い真っ直ぐな針葉樹の高木の森林地帯を背景とした、丸太組積造家屋自体が、正真正銘の木だけの住まい造りなのであるが、それ故にとも言えるのだろうが、北欧の居住空間には木に対する強い執着がある。

もちろん、木の住まいに対する執着は南の温暖な気候風土地帯にもある。それは水気、即ち高湿度と関係がある。人間は自ら大量の水気を放出している生物だが、肌に触れるものはさりと乾燥していなければ気が済まない。衣服の場合は肌着

と肌の間の湿度が50%程度に使たれていると心地よい。その温暖地以上に寒冷地では居住空間の内外の温度差による結露が不都合である。

従って、木材は高度の断熱材でもあり、単体でかなりの強度を持った、シンプルな構造材でもあるという、大きな利点以上に、冷たくない、べとつかない、というような、人の生理的な快感に添う、接し易い材料なのである。そういった感覚があるので、木の生地の色や柄が人間の生理的近親感を誘うという言い方をし、無塗装の白木を絶対視する傾向が今日では強いが、昔からそうであった訳ではない。昔の人々は木は気に曝しては弱いことを知っていて、必ず防腐塗料を塗った。

屋外だけでなく、室内も塗り上げ、そして飾った。ところが木に稀少価値が出てきた近代に入ってから、人々は木質を誇示し始める。模造、偽造の木質製品が出るに及んで、諸々の生理的快感を生る木肌に託す風潮が流行とすらなっている。

さて、北欧の国々の住まいの室内は大振りの木材で仕上げられた壁や家具が室内の温かさをたっぷりと吸い込んで人を包み込む。暖炉の火が放出する熱が攻めならば、木の抱え込む熱は守り、受けの熱であろう。人間にとっては、この広く吸い込まれた熱の方がありがたい。これこそ人の内空間をやわらかく、やさしいものにしてくれる大切な環境熱なのである。

(3) 織物を多用すること

北欧の今日の家屋には軽やかな明るい織物が美しく、豊富に扱われているのが目に付く。そうした飾り付けを見ると奥の深い生活の伝統を思わない訳にはいかない。

昔から織物は人の肌身にやさしいからだけでなく、明るさや、賑やかさや、華やかさを、心の望みを映すようにたくさん使い、飾られた。

この生理的感覚は木に求めるよりも、更に細やかなものであったらう。織物は、もちろん北の地域のみ意味のあるものとは言えない。人の肌に接触させて、不快な感覚をもたらす要素が最も少ない素材であるから、暑きにつけ寒きにつけ、身に纏うものとして多用される。

織物には柔らかさがある。温度と湿度の調節を自然な状態で行うのに適している。重ねたり、着脱したり、扱いが比較的容易でもある。それに織物自体は人間の技術体であるから目的に応じて多様な編成をすることができる。織り質、色調、図柄等についても、ある種の地域的まとまり、社会的流行に応じてさえいるなら、個人的好みによる選択の自由性も高い可能性が与えられている。

南の地域にもそれなりの合目的な織物が高度な発展を見せている。しかし、どちらかといえば北の地域の方が、南に比べると、より多様な織物に関わり得る条件に恵まれているのではないだろうか。さて、室内には、敷物、壁飾り布、様々な幕布、覆い布、包布、光りの調節布、熱の調節布、等、数え上げればきりが無い布の用途があり、またそれに対し、多種多様の製品が芸術的装いをもって待機している。織物はまた視覚的素材でもある。身体に触覚的に関わる以上に、視覚的に生理的感覚や精神的反応をもたらす。先ほど芸術的装いと言ったように、時として象徴性を帯びたものとなる。北欧のインテリアデザインの歴史には市民性を持ちながら象徴的な織物の数々が登場している。それは北欧の全ての人に、等しくふりかかる長い冬の、室内の生活がなければ決して生まれてこなかったものであったらう。

(4) 暖炉のある空間

北欧の民家を見ると2室から3室共用の大きな暖炉が多い。各部屋の接する角に、各々の焚き口をもうけ、煙突を1本にまとめるのである。

部屋の角にとはいっても、各部屋に、ゆうに2メートル四方を越す床面積を取り、ぬるっとした有機的な形態に煉瓦を積み上げ、漆喰などを塗固めて仕上げている。焚き口も焚き易さばかりでなく、熱輻射と熱対流の効率を考えた1メートル立方以上の大きさが取られている。これが台所と共有した暖炉になると、パン焼きオーヴンを付けるため、一層大きな暖炉となるのである。

この大きさはしかし、全体が温まったときの輻射熱の容量を示すものであるから、単に、人の空間を圧迫する化物のようなものとは言いきれない。

もちろん、今日の住宅にはこのような暖炉は築けない。今日では、いわゆる暖房として様々な手段が生まれてきている。人々はその様々な技術、方法を併用して、より快適な温かさを得るのである。しかし、北欧の多くの人々は、いまなお暖炉の火に執着し、心を寄せる。火には求心的な作用があり、火を焚くとそこに精神的な心寄せる核が生じ、人の居住空間をしっかりとめてしまうからであろう。北欧の人々の生活基盤は家族ではなく、個人になったと言われるが、人と人が愛し合うのを止めた訳ではない。火に向かい、火を見る時、人と人はもちろん、ものさえも強く連帯した空間の塊、精神的に濃い、つまった空間が出生する。このような居住空間における火の演出は、北の風土、その歴史の下でなければ本当の意味はないのだろう。

(5) 壁を飾る

北欧ではヨーロッパの室内空間のように、壁に肖像画や写真をぎっしりと掛け尽くした、あの気違いじみた様子には、幸いにして出会わなかった。

私が見なただけのことであるかもしれないが、絵画に描かれている室内を注意して探してみても、比較的穏やかな様子しかなかった。北欧の人々の、家の歴史、歴代の家族、持ち伝えている財産、等々を誇示する度合はずっと慎ましいのかもしれない。壁が多いのはそう変わらない。従って掛ける装額が少ないのであれば、北欧の人々が自分自身をそう言うように、華やかな贅沢は好まないのかもしれない。見聞した中にも例外はあったが、その一部を除けば、全体は確かに室内の装飾が質素なのである。日本人の感覚からすると、飾りで埋め尽くされない空間は間を適切に生かした加減のよいデザインと感じる。北欧だから、まさか戸棚戸袋に仕舞込んでいかにも暗示的な誇示をする日本の見栄はないだろうし、素直で、素朴な、見えるままのデザインであることは間違いないだろう。つまり、見る方の心を重くするような凝縮したものでなく、大ざっぱでさらりと飾っているという感じが、受け手に精神的負担を与えず、好感を持たれる、そういう演出をしているのであ

る。恐らく、そういう意味があろうと思われる。

一方、壁の飾りではないが、北欧の人々には、室内に植物の鉢植えをかなり多く持ち込む傾向がある。これは自然環境から条件反射的に形成された装いなのであろうと考えられる。それとても、盆栽を志向したものではなく、ただの自然、伸び過ぎてしまっている観葉植物であったりする。そうしたものを含め、飾りに必要以上の作為が無いのは事実、そのまま表れているのだ、と見せている。しかし、北欧の人々に作為的な演出が全く無いなどとは言えない。現代的な風潮から言えば、色彩と構図の大胆なアートを喜ぶ精神的な若さが、自分達の空間にうまく表れているかどうか、かなり計算している気配は感じられるのである。

空間演出のノウハウは長所は素直に示し、短所は反対のもので大胆に覆うことだ。という言い方もあるが、北欧のインテリアデザインはその演出法に長けたところがある。

V. あとがき・研修の主題に対する今後の課題

居住空間の形成に関わる北の風土的影響を考えてみよう。今回、研修の機会を得て、北欧に小旅行をすることができた。

インテリアデザインの生成については、元々の動機はもちろん人間の本性にあるにしても、それぞれの社会環境が整わないと、人間的意味を持ったデザインとして見えるものにはならず、記録されるものにならない。封建の時代、専制君主の時代はひとえに君主の館のみがデザインを生成し、記録されてきた。ヨーロッパの君主達は争いもしたが、交流し、契りを結び、自分達の高度な社会環境においてデザインを生成させた。風土とは関わりのない専制王の型を造ったに過ぎないが…。

北欧でも王侯貴族は原則的にはその域を出ない。

しかし、風土は厳として存在する。厳しい寒気、その長い冬。一般の人々はいかに過ごしたか、その自然風土があつて、人間の生活があつて、人々の社会生活にデザインの動機が少しずつ生まれ育っていく。そこに意味があるのだ。

北欧の場合のその市民社会が成熟し、時期を得

ていた頃、私は東洋の地日本で雲をつかむようなデザインを勉強していた頃だが、その北欧のデザインは世界中の人々の憧れを一身に受けていた。

当時、わが国の社会的環境は比較にならぬ程未熟であった。北欧のデザインはその風土性が世界中の人々の生活の理想を物語っていると言われていたが、私も日本人として自分達の理想をその中に読み、熱中した。風土は人間の心と絡み合っただけでデザインを支配している。心は内的要因で、風土は外的要因の主軸だ。しかし、風土は「心」と違って、抜き差しならない条件となる。北欧の風土的要因は素朴さ、やさしさ、自然の寄せる温かい味わいを彼らのデザインの上に投影していた。

さて、人間の居住空間、室内、のデザインを見るとき、その風土的要因は幾筋かの原形の流れに分析できるだろう。例えば、寒さ、暑さ、風雨に対して選択されている幾つかの形の道、また自由とか専制とか工業、或は農業など、様々な社会環境に対する幾つかの形の道、それらは、形、意味を整理すれば誰でも分かる原形、或は、シンボリック・パターンとして理解されるものになるだろう。

私は北、南、そしてまた、様々な社会環境を見、風土的な形の道を筋立てる必要を感じている。

デザインは情報の選択の過程で生成されるものだが、われわれの社会は、情報の増幅ばかりに努

め、情報の使い易さのサービスがない。提供する側は使用し易い情報（確かさ、分かりやすさ、整理された知識、等々）を心がけなければならない。また当然そうした試みが増えてくるだろう。

私もデザインの情報を分かり易くする務めを果たしたいと思っている。

IV. 参考文献

1. 西岡秀雄著「風土と生活」千曲秀版社 S.52
 2. 芳武茂介著「北欧デザイン紀行」相模書房 S.35
 3. 荒正人著「ヴァイキングの末裔—北欧紀行」河出書房新社 S.37
 4. 1987/FORM・FUNCTION, FINLAND/フィンランドのデザインと視覚芸術。日本語版特集号 ハルプロ・クルヴィク・文「私達の暮し方—フィンランドの住宅・過去・現在・未来」
 5. 杉本尚次「ヨーロッパの野外博物館—その民族学的・地理学的研究」国立民族学博物館研究報告 11-1
 6. 杉本尚次「ヨーロッパ民家の民族学的・地理学的研究」国立民族学博物館研究報告 5-2
 7. 世界の美術11北ヨーロッパ「ヴァイキングの遺宝と野外博物館」S.57
 8. 北欧4カ国のパンフレット並びに野外博物館等のガイド・リーフ
- 以上。